西日本新聞

発行所
西日本新聞社
福岡市中央区天神一丁目4番1号（〒810－8721）
©西日本新聞社 2008年
12月18日（木曜日）

回顧 2008年 新年に懸ける ―②

環境都市 市民も企業もまず行動

NPO法人理事長のD・バートさん

―バートさんが理事長を務める特定非営利活動法人（NPO法人）北九州ビオトープ・ネットワーク研究会が総務省の「地域づくり総務大臣表彰」を受賞する。活動の特徴は何か。

研究だけでない「実践」の場として二〇〇一年に発足した。北九州市立大ひびきのキャンパスがある北九州市若松区を拠点に、自然を守り、復元し、活用する取り組みを進めている。「平成竹取伝説」と名付けた竹林保全活動がメーン。雑木林や人家の庭などに侵食してくる竹を伐採する。市民の参加を募って月一回実施。来年二月に五十回目を迎える。

―なぜ竹林保全を。

竹はカシやシイなどの樹木より成長が早く、背も高い。あっという間に広がり、雑木林を覆い尽くしてしまう。密集した竹林の下で雑草が生えなくなると、土砂崩れの原因にもなる。竹の用途がなくなったため、国内の竹林は手入れされず、荒廃が進む。私たちは伐採した竹を企業に引き取ってもらい建材にしているが今後、バイオ燃料化なども検討できるだろう。

―森は二酸化炭素（CO_2）削減で重要な役割を担う。政府が全国六市町を選定した「環境モデル都市」の一つとして、北九州市は植樹プロジェクトを始めたが。

植樹が〝イベント〟だけにとどまってはダメだ。継続した手入れが必要。CO_2削減には既存の森林を生かす「森林経営」の視点が重要になる。植えっぱなしの植樹をしている間に、今ある森林が竹によって侵食されていると気付く市民はまだ少ない。自分の行動、活動について、どんな効果があるか意識することも必要ではないか。

―公害克服に取り組んだ時代から、市内には環境問題に向き合う、多くの市民団体がある。

とても活発に活動していて、市や企業との連携もうまくいっていると思う。小さなグループがたくさんあるのが特長だ。自分の周りで少しずつ活動するから、継続しやすいのだと思う。

里山保全に関しては、何も特別なことを始める必要はない。里山のまきを燃料にし、竹かごを編んできた日本古来のライフスタイルは環境共生そのものと思う。日本人は循環型社会をすでに経験、実践している。

―「モデル都市」としての具体的な活動は年明けから本格化する。市民に期待することは。

まず行動すること。環境への危機感は世界共通。北九州市には活動の基盤となる自然と産業、人口がそろっている。特に企業は生き残りをかけて、新しい「エコ産業」に取り組む、変化のチャンスだ。ただ、環境モデル都市が掲げる「低炭素社会」や「環境共生都市」という言葉は分かりづらい。市は具体的な行動計画を提示してほしい。

（聞き手は北九州支社・畑中知子）

プロフィル　デワンカー・バート。ベルギー出身、43歳。1993年に早稲田大大学院留学。2001年に北九州市立大国際環境工学部助教授（現在、准教授）。同年、北九州ビオトープ・ネットワーク研究会を設立。専門は建築設計、都市計画。北九州市若松区在住。